

国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第5冊

北岸南遺跡

2017.3

香川県教育委員会

序 文

本書には、国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市飯山町東坂元に所在する北岸南遺跡（きたぎしみなみいせき）の報告を収録しています。

北岸南遺跡では、縄文時代から中世に至る遺構・遺物が出土しました。

縄文時代の遺物は、包含層よりサヌカイト製石器が出土しております。残念ながら当該時期の遺構は確認されなかったのですが、これまで知られていなかった縄文時代の遺跡が、周辺に所在する可能性を示すものとして注目されます。

弥生時代の遺構は、灌漑用水路と考えられる溝群が出土しました。ほぼ同じ位置に、繰り返し開削・改修された様子が伺え、水不足に悩まされていた本地域の水資源に対する強い关心を示す考古資料と考えられます。

中世では、12 世紀代の大型建物群が確認されました。本地域の政治的な指導者層の屋敷地と考えられます。本遺跡の北には、中世後半期の方形居館の可能性が考えられている飯山北土居遺跡があり、その前段階の有力者層の屋敷地として、本地域の歴史的展開を考察する上で、重要な資料となることが考えられます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係各機関並びに地元関係各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 29 年 3 月 15 日

香川県埋蔵文化財センター

所長 増田 宏

例　　言

- 1 本報告書は、国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市飯山町東坂元に所在する北岸南遺跡（きたぎしみなみいせき）の報告を収録している。
- 2 発掘調査は香川県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

期間 平成23年9月1日～平成24年1月31日
担当 文化財専門員 蔡本晋司
- 4 調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。また、石器・石製品の石材の同定に関して、
徳島大学総合科学部 村田明広・青矢睦月両氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。
香川県土木部道路建設課、香川県中讃土木事務所、丸亀市教育委員会、地元自治会、地元水利組合
(順不同、敬称略)
- 5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔡本晋司が担当した。
- 6 本報告書で用いる座標系は世界測地系(国土地標第IV系)で、標高は東京湾平均海面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。

SB 堀立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝 SX 性格不明遺構
- 8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位m）である。
- 9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は
遺物の固化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面をA面、右側
の面をB面として記述する。剥片石器の場合はA面が背面、B面が腹面となる。石材は表記がない
限りサヌカイトである。
- 12 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

弥生土器：信里芳紀 2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」『第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前中期～中

- 期初頭の動態』、古代学協会四国支部
- 信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』、香川県埋蔵文化財センター
- 信里芳紀 2011 「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』、香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院
- 大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』、香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公团
- 須恵器： 田辺昭三 1981 『須恵器大成』、角川書店
- 大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 「年代のものさし－大阪府立近つ飛鳥博物館図録40－』
- 佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢』、関西大学文学部考古学研究室
- 中・近世：尾上実 1983 「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』、藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- 佐藤竜馬 1995 「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺楠井遺跡』、香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团
- 佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』、香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬 2003 「近世在地土器の検討」『サンボート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』、香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター
- 太宰府市教育委員会編 2000 「大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－」
- 乘岡実 2000 「中世の備前焼壺（壺）の編年案・紀年銘資料にみる大堺（壺）の変遷」『第2回中近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究会
- 乘岡実 2000 「備前焼鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究会
- 乘岡実 2002 「近世備前焼鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』、岡山市教育委员会
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』、高志書院
- 森田稔 1986 「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号、神戸市立博物館
- 山本悦世 2007 「鹿田遺跡における土師質土器椀の編年について」『鹿田遺跡5』、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

本文目次

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業の経過	2

第2章 立地と環境

第1節 歴史・地理的環境	3
--------------	---

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法	9
第2節 基本層序	10
第3節 遺構・遺物	21

第4章 自然科学的分析の成果

第1節 丸亀市北岸南遺跡における自然科学分析報告	52
第2節 北岸南遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	62
第3節 埋蔵文化財整理業務（北岸南遺跡）に係る火山灰分析業務報告	65
第4節 北岸南遺跡出土サヌカイト製石器の産地推定	69

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷について	72
---------------	----

挿図目次

第1図 道跡位置図.....	1
第2図 周辺地形分類図.....	5
第3図 道跡周辺10cmコンター図.....	6
第4図 周辺道路分布図.....	7
第5図 試掘時出土遺物実測図.....	8
第6図 調査区配置図.....	9
第7図 I区調査区西壁土層断面図.....	11
第8図 I区調査区北、南壁土層断面図.....	12
第9図 II区調査区北、南壁土層断面図.....	13
第10図 II区調査区中央、南壁土層断面図.....	14
第11図 包含層Ⅲ出土遺物実測図.....	15
第12図 包含層Ⅱ出土遺物実測図.....	17
第13図 包含層Ⅰ出土遺物実測図.....	18
第14図 包含層等出土遺物実測図.....	19
第15図 I区石器ブロック石器分布、出土石器実測図.....	20
第16図 II区石器ブロック石器分布図.....	21
第17図 第2道構面平面図.....	23
第18図 SK01(左)・SD01(右)平・断面図.....	24
第19図 SD03・SD04平・断面・出土遺物実測図.....	25
第20図 SD05平・断面.....	26
第21図 SD06平・断面.....	27
第22図 SD07平・断面・出土遺物実測図.....	28
第23図 SD08平・断面・出土遺物実測図.....	29
第24図 SD09平・断面.....	30
第25図 SD10平・断面図.....	31
第26図 溝変遷図.....	32
第27図 SX01平・断面図.....	32
第28図 耕作痕群平・断面・出土遺物実測図.....	33
第29図 SD11平・断面図.....	34
第30図 SX02(左)・SX03(右)平・断面・出土遺物実測図.....	35
第31図 SX04(左)・SX05(右)平・断面図.....	36
第32図 SX06平・断面図.....	37
第33図 第1道構面平面図.....	38
第34図 SD01平・断面・出土遺物実測図.....	39~40
第35図 SD02平・断面図.....	41
第36図 SD02遺物出土状況・出土遺物実測図.....	42
第37図 SD03平・断面・出土遺物実測図.....	43
第38図 SD04平・断面図.....	44
第39図 SD05平・断面・出土遺物実測図.....	45
第40図 SD06平・断面・出土遺物実測図.....	46
第41図 SP31・SP52平・断面・出土遺物実測図.....	47
第42図 柱穴出土遺物実測図.....	47
第43図 SK03平・断面図.....	47
第44図 SD12平・断面・出土遺物実測図.....	48
第45図 SD13平・断面図.....	49
第46図 SD14・SD15・SD16平・断面・出土遺物実測図	50
第47図 SK02平・断面・出土遺物実測図.....	50
第48図 北岸南遺跡I区におけるプランツ・オパール 分析結果.....	57
第49図 北岸南遺跡I区における花粉ダイアグラム.....	59
第50図 [参考] 历年較年代グラフ.....	64
第51図 重軽鉱物組成.....	67
第52図 火山ガラス屈折率.....	67
第53図 積度別重量比.....	67
第54図 サヌカイト产地推定判別図(1).....	71
第55図 サヌカイト产地推定判別図(2).....	71
第56図 道構変遷図1.....	73
第57図 道構変遷図2.....	75

表目次

第1表 石器ブロック出土サヌカイト一覧.....	22
第2表 北岸南遺跡におけるプランツ・オパール 分析結果.....	56
第3表 北岸南遺跡における花粉分析結果.....	58
第4表 放射性炭素年代測定結果1.....	63
第5表 放射性炭素年代測定結果2.....	63
第6表 重軽鉱物組成分析結果.....	67
第7表 砂の粒径別重量(g).....	67
第8表 分析対象.....	69
第9表 原石採取地と判別番号.....	69
第10表 分析値および产地推定結果.....	70
第11表 据立柱建物属性表(1).....	76
第12表 据立柱建物属性表(2).....	77
第13表 据立柱建物属性表(3).....	78
第14表 土器観察表(1).....	78
第15表 土器観察表(2).....	79
第16表 土器観察表(3).....	80
第17表 土器観察表(4).....	81
第18表 土器観察表(5).....	82
第19表 土器観察表(6).....	83
第20表 土器観察表(7).....	84
第21表 平瓦観察表.....	84
第22表 石器観察表.....	85

写真目次

写真1 大東川段丘崖（遺跡東方・南より）	4
写真2 旧河道A（遺跡西方・北より）	4
写真3 大東川現流路（遺跡東南方・北より）	4
写真4 II区深掘りレレンチ土層断面	16
図版1 北岸南道路のフラント・オバル鋼微鏡写真	60
図版2 北岸南道路の花粉・胞子顕微鏡写真	61
図版3 北岸南道路【X黄褐色粘土（包含層IV）試料 中の火山ガラス重晶石顕微鏡写真】	68
図版4 道構写真	88
I区 SB01～03全景（南より）	
図版5 道構写真	89
I区 岸の上遺跡方向遠望（北より）	
図版6 道構写真	90
I区西半1面全景（北より）	
図版7 道構写真	91
I区全景（南より）	
図版8 道構写真	92
I区 第2面全景（北より）	
図版9 道構写真	93
I区 第2面全景（南より）	
図版10 道構写真	94
II区 第2面全景（北より）	
図版11 道構写真	95
II区 第2面全景（北より） 般野山より遺跡遠望（北より）	
図版12 道構写真	96
II区 中央南北土層断面（北西より）	
I区 調査区西壁（SP48）土層断面（東より）	
I区 調査区南壁土層断面（北東より）	
図版13 道構写真	97
I区 第3面全景（西より）	
I区 石器ブロック遺物（117）出土状況（北より）	
II区 石器ブロック遺物（119）出土状況（南より）	
図版14 道構写真	98
I区 SD03・SD04全景（東より）	
I区 SD04（調査区西壁）土層断面（東より）	
図版15 道構写真	99
I区 SD05（調査区西壁）土層断面（東より）	
I区 SD03・A土層断面（東より）	
II区 SD07遺物（130）出土状況（北より）	
図版16 道構写真	100
II区 SD08下層遺物（129）出土状況（東より）	
II区 SD09遺物（126）出土状況（北より）	
I区 線作痕検出状況（南西より）	
図版17 道構写真	101
I区 SB02・03全景（北より）	
I区 SB01全景（東より）	
I区 SB01～03全景（南より）	
図版18 道構写真	102
I区 SB02～04全景（南より）	
II区 SB06全景（北より）	
II区 SB05全景（北より）	
図版19 道構写真	103
I区 SP31・SP52遺物出土状況（北より）	
I区 SB03（SP11）遺物出土状況（南より）	
I区 SB02（SP23）遺物出土状況（南より）	
図版20 道構写真	104
I区 SB01（SP34）柱材出土状況（南より）	
I区 SP25柱材出土状況（東より）	
II区 SP88遺物（176）出土状況（北より）	
図版21 道構写真	105
I区 SP77敲石出土状況（南より）	
I区 SP75敲石出土状況（北より）	
遺跡遠景（南より）	
図版22 遺物写真	106
97・144・146・150・160・171・176・179	
図版23 遺物写真	107
2・13・14・15・16・17・18・19・20・21・28・ 79・80・113・117・118・119・124・125・128・ 129・133・134・135・137・138・140・162・S1・ S8・S26・S27・S29・S31・S32	

付図目次

付図1 北岸南道路平面図

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

国道438号は、香川県坂出市と徳島県徳島市を結ぶ主要幹線道路である。近年の交通量の増加による慢性的な交通渋滞やそれに起因する交通事故の抑止を目的として、香川県土木部道路建設課（現・道路課）では、同路線の改築事業を計画した。これをうけて香川県教育委員会では、同路線周辺には多くの埋蔵文化財包蔵地が所在していることから、平成5年度から道路建設課と協議を重ね、その適切な保護に努めてきた。

こうした中、今回報告する北岸南遺跡が所在する丸亀平野東縁部については、安定した平地が広がり、



第1図 遺跡位置図

未知の包蔵地の所在が予想されたことから、国道438号（飯山工区）道路改築事業にかかる用地のうち、丸亀市飯山町原地区周辺の工区について、香川県教育委員会により平成22年度に試掘調査を実施した。調査の結果、対象地中央部の2,100mにおいて、弥生時代から中世の遺構・遺物を確認し、北岸南遺跡として事前の保護処置が必要と判断された。これをうけて香川県教育委員会は、香川県埋蔵文化財センター（以下埋文センターと略す）及び道路建設課と協議を進め、翌平成23年度に埋文センターが発掘調査を実施することで合意した。なお、試掘調査の内容については、報告書（香川県教育委員会2012）を参照されたい。また、試掘調査時に出土した遺物を、第5図に掲載した。

第2節 発掘調査と整理作業の経過

平成23年4月1日、香川県教育委員会は道路建設課との間で「道路事業における埋蔵文化財発掘調査業務に関する協定書」を締結し、本遺跡の調査を同年9月1日より5ヶ月の予定期で発掘調査を実施することとした。

発掘調査は直當方式により実施した。調査は、現場事務所や安全柵設置等の事前準備が整った9月15日より開始した。11月15日には、地元飯山北小学校6学年の教諭・児童123名を対象に、遺跡見学と発掘体験学習会を実施した。また、11月26日には県民一般を対象とした、1区の掘立柱建物についての現地説明会を開催し、61名の参加を得た。翌平成24年1月27日には現場での調査を終え、31日に事務所を撤収し、すべての現地業務を終了した。

整理作業は、平成27年4月1日から6月30日に埋文センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の清浄、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28%入りコンテナ18箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺

平成23年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
範括	課長 岩井 宏秋 課長補佐（範括） 亀山 隆	範括	所長 藤好 史郎 次長 真鍋 正彦（業務）
範務・生涯学習推進グループ	副主幹 香西 としみ 主任 主事 丸山 千晶	範務課	副務課長 林 文夫 主任 古市 和子
文化財グループ	課長補佐 西岡 達哉 主任 文化財専門員 森下 秀治 文化財専門員 松本 和彦	調査課	主任 高木 秀哉 主任 広瀬 健一 主任 藤 哲也 文化財専門員 碓本 香司 嘱託（土木） 砂川 智夫 嘱託（調査技術員） 稲治 千佳子

平成27年度整理体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
範括	課長 増田 実 副課長 小柳 和代	範括	所長 真鍋 昌宏 次長 前田 和也
範務・生涯学習推進グループ	副主幹 松下 由美子 主任 和木 麻佳	範務課	課長 前田 仁美 主任 寺岡 秀哉 主任 高木 美江
文化財グループ	課長補佐 片桐 孝浩 主任文化財専門員 山下 平重		主任 丸尾 麻知子 主任 岩崎 昌平

文化財専門員	乗松 真也	調査課	課長 主任文化財専門員 嘱託 嘱託 嘱託 嘱託 嘱託 嘱託 嘱託 嘱託	森 格也 森本 菲司 市川 孝子 猪木原 美恵子 甲斐 美智子 葛西 黒 香西 栄理 高橋 千恵 森 供代 山地 流理子
--------	-------	-----	--	---

物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。

発掘調査及び整理作業の体制は下記のとおりである。

第2章 立地と環境

第1節 歴史・地理的環境

遺跡は、丸亀市飯野山町川原189番地ほかに所在し、調査前の地目は水田等の耕作地であった。遺跡が所在する丸亀平野は、東西約13km、南北約10kmの扇状地性の海岸平野で、香川県中央部に位置し、東より大東川・土器川・金倉川などの中小河川が瀬戸内海に流入する。平野部東西は、それぞれ瀬戸内海に突出した標高約400mの五色台山地と、標高381mの弥谷山丘陵等の山塊によって画され、また南縁は岡田・高屋原・仲南といった上位及び下位段丘が取り巻き、北の瀬戸内海に開けた地形環境を呈する。また、平野部内には標高200～400m程度の中小独立丘陵が散在し、これらの基底部は領家花崗岩類よりも、頂部付近には讃岐岩質の安山岩が分布する。遺跡は平野東部、ビュート状の山塊である標高421.9mの飯野山南麓の、標高約18mの北に緩やかに傾斜する平地上に立地する。

遺跡は、主に土器川によって形成された扇状地の北縁部に位置（第2図）し、その北方には飯野山との間に小規模な沖積平野が展開する。

遺跡周辺、土器側右岸の扇状地の扇面面積は約5km²、遺跡周辺での勾配は5.7%と、緩傾斜扇状地上に遺跡は立地する。扇状地疊層の上面は、高松平野でも想定されている（木下1992）ように、比高2～3mの波状の起伏をなしている可能性があり、凹地部分は扇状地の旧中州間の網状流跡・旧低水路と考えられる。第3章第2節で詳述するように、その上面、主に旧中州間の凹地部は、粗砂～シルトといった比較的細粒の堆積物で覆われている。

本遺跡では、この細粒堆積層の最上位層よりサヌカイト製石器が出土し、同層中からは鬼界アカホヤ火山灰の2次堆積が確認された。また、同様に扇状地北縁部に立地する善通寺市永井遺跡では、最上位層から縄文時代後期の遺構・遺物が出土した。細粒堆積層の堆積時期の下限が、縄文時代後期に下るとともに、遺跡周辺で細粒堆積層中に縄文時代の遺跡が埋もれている可能性を示唆するものと考える。

なお、飯野山東麓には更新世段丘が認められ、近接する東坂元三ノ池遺跡では、後世の遺構への混入資料だが、少量のナイフ形石器や翼状片石核が出土した。今後飯野山周辺や大東川東岸の段丘部の調査が進展すれば、当該期の遺跡が確認されるものと思われる。

さて、遺跡が立地する扇状地面は、微細な起伏が顕著に認められ、必ずしも平坦な地形面を呈していない。第3図に示されるように、それら凹地は平地面を樹枝状に走行し、埋没旧河道ないしは低地帯と



写真1 大東川段丘崖（遺跡東方・南より）



写真2 旧河道 A（遺跡西方・北より）



写真3 大東川現流路（遺跡東南方・北より）

考えられる。これら旧河道・低地帯間は、不整な紡錘形を呈する見かけ上の微高地を形成し、広狭さまざまな微高地が、平地面上をパッチワーク状に広がる景観が展開する。

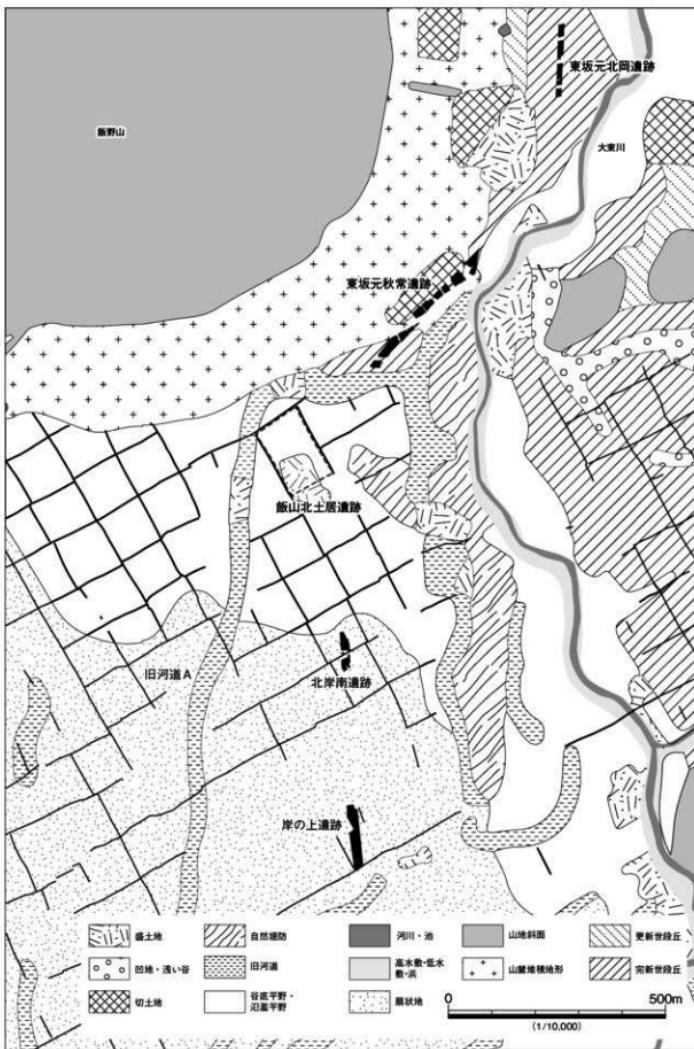
遺跡周辺では、第3図に示したように、低地もしくは旧河道がII区からI区西部にかけて南北に走行し、I区東部以北に狭小な微高地が展開する。次章で詳述する包含層Ⅰ～Ⅲ層は、この低地帯の埋土の一部と考えられ、I区西部からII区にかけて堆積する。

こうした微地形は、少なからず遺跡の立地にも影響を与えたことが想像され、より広い微高地を中心に弥生時代以降の集落が經營され、埋没の進んだ旧河道や低地帯は、水田等の耕作域として利用されたと考えられる。また、微高地間に横・縦断するように幹線水路が整備され、それから派生する枝水路が各耕地へと用水を供給したのであろう。本遺跡の調査では、弥生時代終末期前後における、そうした灌漑水路網の一端を検出した。

当該期の集落は遺跡周辺では不明瞭だが、近年の岸の上遺跡の調査で古墳時代後期の堅穴建物が多数検出され、また飯野山や遺跡東部の丘陵上には、前～後期の古墳が多数分布する。

律令体制という一定度成熟した国家の形成は、集約的な労働力の編成を可能とし、こうした自然地形に規制された土地利用のあり方を、ある程度克服したと想像される。岸の上遺跡では古代南海道と推定される遺構が検出され、それを基準にした、いわゆる条里型地割が平地部上に広く展開する。さらに遺跡南部の法勅

寺周辺では、条里型地割に先行するとされる正方位地割の遺存が確認される。しかし、こうした地割の施工は、必ずしも平地部一円に施工されたのではなく、豪族居館や官衙的性格の施設周辺など、開発に



第2図 周辺地形分類図 (国土地理院の電子地図 (数値地図 2500 (土地条件)) を 25%縮小し、道路位置を追記して掲載)



第3図 遺跡周辺 10cmコンター図（九鬼市都市計画図を62.5%縮小、一部を加工して利用）



第4図 周辺遺跡分布図（国土地理院の電子地形図 25000「丸亀」を 250%拡大し、遺跡位置を追記して複数）

有利な地点を選んで、爬行的になされたことが想像される。

本遺跡でも、2区北部で正方位に配された溝が検出された。遺跡南方に所在し、推定南海道に隣接する岸の上遺跡、あるいは正方位を志向して建立された法勅寺を核とした開発エリアの北限を示すものと評価されよう。

また、東西に走行する南海道とそれに直交して北流する大東川・土器川の両河川の渡河点には、陸上交通と水上交通の結節点として物資の集散地などの施設が設けられた可能性も考えられる。

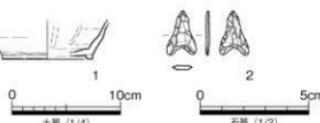
こうした状況が大きく変化するのは中世初頭である。遺跡の東西を北流する土器川や大東川の河床の下刻により、遺跡の立地する扇状地面や谷底平野が段丘化し、高燥化した（木下 1995）ことが大きな要因である。以前の用水網には大きな変更が迫られたが、それと引き換えに安定した可耕地が広域にもたらされることになり、乾田化により収穫量の増加も大きなものが予想される。

次章で詳述する包含層Ⅰ～Ⅲ層は、Ⅱ区からⅠ区西部にかけて南北に走行する低地帯の埋土の一部と考えられる。その時期的下限は11世紀中葉～後葉にあり、段丘形成により低地帯の埋没が停止した年代を示す。本遺跡で確認された中世初頭の大型建物によって構成される屋敷地は、こうした埋没の停止した低地帯の一部を取り込んで配置される。その造営主体は、上述した自然環境の変化に順応して農業経営に成功した富農層であった可能性も考えられる。

当該期の遺跡は、例えば13世紀の屋敷地は東坂元秋常遺跡で検出され、飯山北土居遺跡では居館の堀とみられる遺構が検出されている。寺院は、文献史料に法勅寺のほか、島田寺や三谷寺が新たに建立されたことが記され、平地部には中世石造物が散在している。こうした遺跡の調査より、本地域の開発が、当該期に大きく進展したことを物語ると考える。

引用文献

- 香川県教育委員会 2012「埋蔵文化財試掘調査報告 XXIV 平成 22 年度 香川県内道路発掘調査」
- 木下晴一 1992「道路の地理的環境」「空港跡地道路発掘調査報告 平成 3 年度」、香川県教育委員会・側香川県埋蔵文化財調査センター
- 木下晴一 1995「大東川流域の段丘層」「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 16 号 川津二代取道路」、香川県教育委員会・側香川県埋蔵文化財調査センター



第5図 試掘時出土遺物実測図

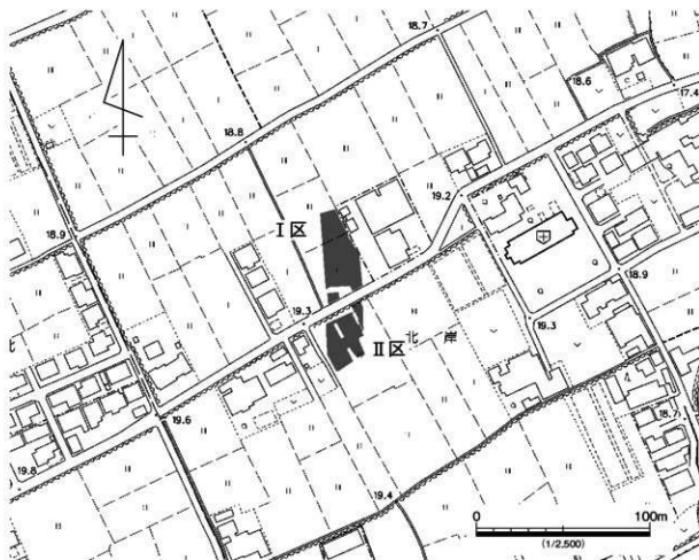
第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査対象地は、道路建設予定地であるため、南北延長約92m、東西幅約24mと南北に細長く、調査地内中央を市道が東西に横断する。調査区は、第6図に示すように市道より北側をI区、南側をII区と大きく区分し、調査時の工程や調査開始前に設置されていた隣接耕地への用排水に使用する仮設水路等により、調査段階でさらに小区画に分割して調査を実施した。調査前の地目は、すべて水田などの耕作地である。

調査は、直営方式により実施し、基本的に構造検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力にて掘り下げをおこなった。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。包含層等の遺物については、調査小区が狭小であるため、とくにグリット設定は行わず、必要と認められた遺物については、トータルステーションで出土位置を測量・記録し、出土状況を写真撮影するなどして取り上げた。

遺構名は、調査時には検出順に付したが、本書を作成するにあたり、柱穴以外はすべて新たな番号を付して統一した。なお、調査区名は調査時のものをそのまま踏襲する。



第6図 調査区配置図(丸亀市都市計画図を一部加工して利用)

第2節 基本層序

土層序の観察は、南北方向についてはⅠ区は調査区西壁、Ⅱ区は西半調査小区東壁において、東西方向についても各調査区の南北両壁においてそれぞれ行った。以下、調査区毎に、基本層序について整理する。

Ⅰ区の基本層序

Ⅰ区は、調査前は1筆の水田等の耕地として造成され、現地表面の標高は18.5m前後であった。現耕土層下には、1～2層に分層される旧耕作土・床土層が水平堆積し、出土遺物より近世後半以降の堆積が想定される。本層下面で、掘立柱建物等の柱穴掘り方を確認し、第1遺構面とする。本遺構面の標高は、調査区南端付近で18.25m前後を、北端付近で18.15m前後をそれぞれ測り、緩やかに北へ傾斜する。後述するⅡ区では、本遺構面上に包含層の堆積が認められたが、本調査区では後世に削除され残存しない。

上述した旧耕土層下には、調査区中央部SD04や北西部SD01のそれぞれ上面付近を中心に、灰白色粘土（第7・8図10層）がレンズ状に堆積していた。SD04等開削後の遺構両岸の浸食による帶状窪地を最終的に埋める堆積層で、最大層厚0.15mを確認した。前章で既述したように、低地帯埋土の最上層に相当し、本層の堆積により、調査区周辺は一定程度平準化されたと考えられる。

第1遺構面のベースとなるのは黄灰色粘土層（同図11層）で、調査区南東端部を除くほぼ調査区全面に堆積し、調査区東南部で層厚0.02m、SD06上面付近で同0.14m前後、調査区北東端部付近で0.10m前後をそれぞれ測る。本層からは、土師器杯蓋・皿や須恵器杯蓋・皿・甕、弥生土器壺等の小片のほか、サヌカイト製石鏃や剥片、鉄滓がコンテナ1箱程度出土しており、包含層Ⅱとする。極少量の土師質土器や黒色土器の碗片が出土しているが、これは本来本層上面より掘り込まれた遺構中に含まれて